



TITLE:

## 基督教文明の發展概論(二)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

---

CITATION:

財部, 靜治. 基督教文明の發展概論(二). 經濟論叢 1922, 15(1): 37-46

ISSUE DATE:

1922-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127923>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第一號

大正十一年七月一日發行

## 論叢

支那の古典に見られる社會政策

法學博士 田島 錦治

租稅負擔の一般と租稅の民衆化

法學博士 神戸 正雄

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

社會哲學のに於る主意的二元論的思想

法學士 恒藤 恭

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

## 時論

政費節減論

法學博士 小川 郷太郎

## 說苑

功利主義と生産政策

經濟學士 堀 經夫

## 雜錄

勞農露西亞の社會保險

經濟學士 岡崎 文規

英國と勞農露西亞

經濟學士 小川 福太郎

經濟學會公開講演會記事

## 基督教文明の發展概論 (二)

財 部 靜 治

### 三

諸觀念の歴史は人の歴史なり、諸觀念を有するかために、人は一層下等なる一切の動物と區別せらる、而して人間史上著大なることは、凡てその源を觀念に歸せしめ得へし、即ち重大の影響を及ぼせる一觀念は、人間史上古來時と共に、衆人の心情中に採用せらるることとなり、人間進歩に於ける次の一新時代により、踏襲せられたり。東洋に於ける孔孟及釋迦の思想は、恰もかかる觀念の著例と、なし得へき所なるか如く想はるるか、今姑らく之を不問に付せんか、古猶太人間に容れられし Jahve の思想は、かかる胚種思想の一たりき、即ち之かためその後常に世界をして、異れる一世界たらしめたり、その思想か始めて明白に容れられ、弘布せられてより此方、人間史は常に之により像とられつつありき、思想そのものは始めて世に容れられたる時より、今日に至る迄偉大を加へ、高潔研磨の歩を進め、醇化の永遠過程を送りつつ、人間史に形骸を附與したる、大心方の一つとなれり、次に基督教は他の一大思想の所産として現はれ、その承認以來世界は一新世界となれり、その意義如何に大なるかは、西洋に於て世上一切の出來事に就き、そ

の年代を起算するに際し、同教開基者を元となすの風を、馴致し得たるによりて明かなり、以下同教により文明に及ぼせる影響に就き、その梗概を繙ぬることとせん。

光緒五(一八七九)年印行に係る、支那人黃遵憲著「日本雜事詩」中に曰く、「余考泰西之學、墨翟之學也、尙同兼愛、明鬼事天、卽耶穌十誡所謂敬事天主、愛人如己」と説明し、歐米に倣ひし當時の本邦學制は、「欲廢儒書讀墨經」するもなりと詠したり、後世理想的無政府主義者、及 Tolstoi の社會思想を、生むの基本となりし、金箴 the Golden Rule 卽ち己れの欲する所、之を人に施せとするの格言が、基督教の一大旨たるを、認めたるの趣あるは可なり、されどその所説上教學と宗教とを混同せるの識りあるのみならず、墨翟を以て基督教の一切を、語らしめんとせるは當らざるに似たり。

#### 四

現今西洋文明を組成せる諸國民の群、卽ち歐洲諸國及その殖民地及附庸國は、特殊の意味に於ては、羅馬帝國よりの一直接發展なり、詳言すれば羅馬帝國は、土地財産の基礎に立てられ、又階級鬭争及征服により、武斷的一貴族制に成熟せる、典型的一國民たりき、而してかかる軍國的膨脹の時代に際し、之に配するに農本時代の開化を以てせるより、奴隸制の發達及中産階級の壓

迫は、當然之に伴ひて惹起されたり、唯その間最も專制的なりし時代と雖も、多少の賃傭勞働及小資産ありしことは、之を認めざるを得ず、次いて昌んなる軍國主義の時代過ぎされる後、帝國は一の靜的時代、に鎮まり行き、奴隸制は徐々に農奴制、及拘束を受けること奴隸よりも幾分か寛なりし一分限に變り、財産及政權を土臺とせる、世襲貴族制及過大農は、それ自體滅落の墳墓を掘り廣げつつ漸次衰替し、終に北方より一層勇猛なる蠻民の襲來に遭ひ、之か壓迫に屈伏したりされどその間社會内には、低き階級民よりの開化運動起り、その傳道的事業により、右の野蠻人を支配し、右衰亡期に際して、恰も組織立替の核心となれることを立證せり、この開化運動は即ち基督教たりき。

## 五

基督教の意義を會得するためには、その起源に遡り、古猶太人の歴史を尋ねるの要あり、夫れ Palestine は敵視せる二大帝國、Babylonia 及埃及の中間に位せる、古代世界の白耳義たり、その國と是等の帝國とを連ぬへき、商業の大道に當り、その北方にはヒット Hittite 民族の強あり西にはフェニシアの商人及地中海沿岸諸國あり、Palestine かその競争場裡に入り來れるは、割合に遅かりしに拘はらず、右の如き地位を占めしより、一世界勢力たらんとするの、野心により

攪き亂されたり、されど自然の富源を擁すること多からず、又人口も夥しからざりしより、その勢力は大敵國を凌ぐを得ず、その物質的野心はかくて抑塞せられしより、純化せられ、一宗教の開發となりて現はれたり、その打ち建てんとせる王國は、此世の王國に非りき。

猶太の歴史は猶太人以前に於ける Palestine 住民 Cananites 部族 (Ham の子 Canaan に始まる)

か、周圍の平原より、Palestine の南部 Amorites 族の諸商業都市を、侵略せるに始まると謂ひ得へし、その侵略者は(神が Abraham に約し給へる)約束の國土中、その一部即ち大體にさ迄有望ならざる、高原地方のみを侵略し得たり、彼等は茲に土着して、漸次 Amorites 族と混和したり、されどその社會は土地貴族の確立、富及權力不平等化の趨勢により、影響せらるること極めて輕微なりしより、博愛及平等、部族の典型的理想を墨守し、その理想はその神たる Jahweh (普通に Jéhova と呼はるゝされど猶太人が敬虔の餘り、決してその神名を呼はざるの、風習を馴致せるより、正當の神名何たるかにつき議論あり、Jahweh 又は Jahveh とすは一層正當なりとせらるゝ、舊約全書出埃及記第三章十四に「我ハ有テ在ル者ナリ」<sup>エホヴァ</sup>し「我有トイフ者我ナナンナラニ造シタマフ」<sup>エホヴァ</sup>とあるは之なり) 崇拜により象徵されたり、従ひて彼等は Amorites 族の商業的行動、詳言すれば大地主制度 Landlordism 及利息附金錢貸借の風習を、憎惡すべきものとしたり、されど又増大し行く諸都市の商業本位主義は、彼等をも避け難き階級統治の綱目内に引き入れ初め、商業及放資の發端的手續により、高原地方と中心市場とを、連結せしむること

となれり、次いて避け難き經濟的壓迫は起り、引いて又 Jahveh 崇拜者の民主的精神は爆發し、衆望ある一君主制への要求となれり、而してその期待によるに、國王は地主及金貨の、貧慾に反抗すべき、民衆の擁護者たるべく、父なき者及寡婦を保護し、又平等の部族的法律を強行するはその義務なりとせられたり、之を克己寛仁の徳を顯揚せる、我國古來の君主觀念に照し、又「大道之行也、天下爲公、選賢與能、講信脩睦、故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壯有所用、幼有所長、矜寡孤獨廢疾者、皆有所養」とするの大同社會觀念（禮記禮運篇參照）の如き政治思想社會思想に富める、東洋觀念を以てせんか、君主制に關する右の如き一見解か、相當なる諸事情の下、西洋史の古代に現はれしは、寧ろ當然とするに足るも、近世米國人の如く、國境を開拓擴張することに馴らされ、加之民主制を以て、一形式によれる中央集權と組合はせず、寧ろ地方自治制及財産權と組合はすを、通例としたる者としては、かゝる一變遷を了解せんこと、難事たらん、そは兎も角とし、吾人は近日獨の碩學 Wilhelm Wundt の一近著に接手し、就中所有權を神聖化 Die Heiligkeit des Eigentums せる、英米功利主義の弊害を指彈し獨逸古來の道德觀念、即ち守信神聖化 Die Heiligung der Verträge のために氣焰を挙げ、その熱血は迸りつゝ「吾人は欺瞞者たらんよりは、寧ろ被欺瞞者たらんことを選ぶ」Wir Ziehen es vor, nicht die Betrüger, Sondern die Betrogenen zu sein と絶叫せるを想起し、又之を右の史實に照

し來る際、敗殘の國土却りて、永遠の活火を窺はしむるの、慨あるを想はすんは非す。

右衆望ある一君主制への要求に促されて、猶太族 David の王國は建てられたり、國民的王國の覇を唱へんかために、争はれたる鬭争は、Jahweh の神と地祇たりし Baal 神との間に於ける宗教的鬭争の形式を占めたり、Baal 崇拜は大地主制度に據れる、倫理の符徴的表明なり、詳言すれば財産權の優越を土臺とせる、地方的實際獨立の制度なり、而して Baal 神に對する Jahweh の勝利は、その國民的政府の優勢、理論上よりせば Jahweh 信者たる、部族倫理の優勢を意味したり。

茲に挿説するを無意義とせざるは、猶太人の勤勞觀なり、古猶太人 Israelites によりて示さる經濟觀經濟施設中、商業取締規定、公平代價觀、農業獎勵等の如く、注目すべきものは多しと雖も、就中彼等が勤勉致富の目的上、採れる態度は、經濟史上珍しき事實の一つなり、古くは Palestine の不毛なる丘陵を、乳及蜂蜜流れ出つる一國土、稠密なる人口の安樂なる住家に化せしめ、富を蓄積して四散せる後も、その散在せる諸地方征服の歩を進めたり、右の點につき優越せることゝ、人種との間に關係ありとするを得す、盖しその同族 Semites たりし阿刺比亞人は、あらゆる經濟進歩に、頑強なる抵抗を示したればなり、古猶太人の成功は、その道德觀、宗教觀、觀念の結果たり、その諸觀念は富の生産（特に農業に、専心することゝをその第二天性たらしめたり、そ



の他の古代諸國にありては、勞働は一奴隸の運命として輕侮せられしも、猶太人間にありては之と反對に、幾多の預言者は之を以てあらゆる繁榮の、根源として讚美し、怠惰は邪惡及窮迫を生むの、母として非難したり、手足勞働は遷善の一方便と想はれ、學識ある者と雖も、之に當ることを強ひられたり、幾多の聖賢及その門弟は、一様に犁を手にし、「働き且つ學ぶ」ことを、その格言としたり、舊約全書 Solomon の箴言中より、數節を引かんか、「手ヲモノウクシテ動クモノハ、貧クナリ、勤メハタラク者ノ手ハ、富ヲ得」(第十四章)と説き、或は「惰者ヨ蟻ニユキ、其爲ストコロヲ觀テ、智慧ヲエヨ、夏ノウチニ食ヲソナヘ、收穫ノトキニ糧ヲ歛ム」(第六章六及八)とし、或は「シバラク臥シシバラク睡リ、手ヲ又キテマタ片時ヤスム、サラバ汝ノ貧窮ハ盜人ノ如クキタリ、汝ノ缺乏ハ兵士ノ如クキタルヘシ」(第六章十及十二)と訓へたり、かゝる勤勞觀も後世に影響する所多かりしと雖も、吾人が主として問はんとする所は、その社會的觀想にあり。

猶太人により立てられたる君主制は、現今ならば社會立法と呼はるべきものにより、平等組織を實現せんとするの、試みに當るの土臺となされたり、土地は Jahveh の特別保護、詳言すれば國民の特別保護下におかれ、大地主制度を防ぐの備へとして、一農圃か不運のために、他人に譲渡されたりとするも、規定の特定年限經過後は、元の所有者又はその相續人に、返還すへしとの條項を設けたり、一時的窮迫を救ふため、金を貸すことは、一の宗教的義務と唱へられ、又何れ

かの仕方により利子を徴するは、外人に對するものゝ外、最も厭ふべき惡行の一つとして烙印せられたり、又奴隸に賣られたる猶太人は、幾季節か循環せる後釋放さるべく、同様に又負債も帳消しによるべきものとせられたり、この立法か何れの時か確實に、實行されたらんことは、毫もあり得へきに非ず、立法家たりし僧侶豫言者か、日常生活の事柄に就き、些細に規定し命令せる所、燦然として古文献に残さるゝを見、之か理想的傾向を揚言するか如きことあらんか、それは如何なる程度迄、その當時に於ける普通人の思想を反映せるものたるか、疑念を起さるを得ざるに至らん、\*事實上大なる土地財産か、普通の經濟的過程により、生み出されしは、幾多の豫言者か、家に家を合せ、土地に土地を合はす者を、侮蔑せるにより明かなり、又諸王は一般に、寧ろ自己の快樂及野心を、追隨する方法を選へるより、公衆福祉の擁護者としては、極めて不適任なるを立證せり、諸王は民衆と同様 Baal の跡を逐ふに至り、Jahweh の法律を忘れたり、されど右立法ど、富及貧困に對する豫言者の態度とは、舊約聖書による宗教の、社會的性質を明かに證明す。學者によりては以上の事柄に就きての、詳細規定を掲ぐる利未記第二十五章(二三)、「地ハ我ノ有<sup>レ</sup>なり、<sup>モ</sup>汝ラハ客旅<sup>カヂビト</sup>マタ寄寓者<sup>ヤドレルモ</sup>ニシテ、我トトモニ在ルナリ」と、社會主義の原則を書き寫せるか如きものあるを見、その思想は社會主義の、最初發現なりと迄、極言する者あるを見るも、それは過言なり、舊約聖書に現はるゝものは、一つには行届ける貧民救済策たり、之を踏

\* cf. Haney, History of Economic Thought, '15. pp. 24, 25.

求、永續的負債より救ひ、無利息の借財及慈善に預らしめんとするにあり、二つには富者の不正及壓制に對する、諸預言者の幾多攻撃たり、されはその全部の目的とする所、殆んど個人を忘れたる國民連帶にありとは議し得べく、又 Moses かその法律を編むに當りては、富の不平等防止を心にしたるか如きも、そは社會主義をなすことなく、又社會的民主制と、相去ること遠きは確かなり。

右希伯來立法の目的、即ち發展し行く國家のために、富の分配を統制すへき、一國民主義を創立することは、褒むべき一目的たりしも、採用されたる諸方便は、全く不適當なるものたりき、所有地の擴張と、利息附金錢貸付とを禁せるは、特權を生むの源泉を、絶たんとせりとの意味により、その目的としては正しかりしも、一面財産兼併は社會をして、有力なる組織的一全體に、統合せしむるの自然的方便となるものを以て、右の禁示は當時に於ける、萬國競爭事情の下にては、自殺的たりき、素より經濟的統合を惹起せしむるため、別に一仕組か延はされ得たりとせんか、かゝる禁示も實行可能たりしならん、古猶太人か社會的過程につき、科學的理解を遂ぐる能はず、従ひてかゝる一代用物を、發見し得ざりしは一の失敗なり、而も亦猶太人か迫害及流刑の憂目に遇ひつゝ、克くその理想に忠實にして、その幻想を活如たらしめ得たるは、現代人としては恰も學ぶべき所あり、後日天國に關する基督の希望 Messianic hope に、理想化されたる

\* cf. Haney, op. cit. p. 38; Maier, Soziale Bewegungen und Theorien. 4. Aufl. '10, SS. 17, 18.

もの、實は David の王國に含まれたる、社會觀念なるを以て特に然りとす、この社會的夢想は聖書の題目なり、それは基督教の奧義なり。

猶太人の夢は羅馬專制政治の、破砕的重味のため壓迫せられ、失望の病症狀態によりてのみ、その生命を撃くが如く思はれたり、而も亦羅馬の社會組織にありては、右の夢想を物質化し、基督教として知らるゝに至りし、平和論的革新を生ぜしむるに、有利なりし特殊諸元素ありき、是等の元素中には、希臘開化による激勵、帝國下に老ひ過きたる部族的自然宗教の衰替、安固なる秩序樹立と共に、起れる人道主義化の傾向、羅馬かそれ迄に物質的基礎を築きし、一世界國家の觀念あり、世界制度の畠はかくて準備されしか、希伯來の開化は之に種子を播き、その種子は數世紀の艱難を経て成熟したり。(未完)